
潜在能力（仮）

tommy

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

潜在能力（仮）

【Nコード】

N9099Z

【作者名】

tommy

【あらすじ】

1 人道路の真ん中を歩き続ける男。十字路の交差点に差し掛かった時 とても人間とは思えない奇妙な女に遭遇してしまうが…

第1話 走れ！！

昨日見た夢の事だ……いや…正確には夢ではなかったのかもしれない。

僕は道路の真ん中あたりで1人ぽつんと突っ立っていた。道路にはチラホラと車が走っていたが、僕の姿は見えていないようで、体スレスレのところを走り抜けてくる。

だが不思議と怖くはなかった。これが夢なんだということに頭の片隅で薄々気付いていたからだ。

僕は平然と道路の真ん中を歩いて行った…ただひたすらに歩き続けた。

ふと遠くの方に目をやると 何か白い物体がスーッと道路を横切っ
て行くのが見えた。それは人のように見えたが 僕は気にすることなく歩き続ける。

しばらくすると 十字路の交差点に出た。交差点の真ん中に誰かがいる。目を凝らして見ると それは白い服を着た女の人のようにだった。

何かぶつぶつとしゃべっている…だが僕にはそれを聞き取ることができなかった。

次の瞬間！！その女はすごいスピードで僕目掛けて走ってきた。

その速さは尋常じゃない 車よりも速く どんどん僕へと迫ってくる。とにかくアレは人が出せるスピードじゃない 僕は必死になっ

て逃げた　これが夢だということも忘れて…

僕は怖かった　泣きそうになった　あの女に捕まったら僕は終わりだ　そう思ったからだ。

ひたすらに走った　だがあんなに速い女に走って逃げ切れるはずがない、僕は思い切って走りながら後ろを振り返った。すると　こともあろうに女は僕の随分後ろを走って追いかけてくる…どういう事だろう？…すぐにその理由は分かった。

僕はその女よりも速いスピードで走っている…時速80キロぐらいだろうか？…なぜこんなに速く走れているのかは分からない。

とにかくこんだけ速く走れば　あの女から逃げ切れる　そう思い顔を前に向けると　目の前に車がこっち向かって突っ込んでくる。

引かれるッ！！そう思った僕はとっさになって上へと跳び上がった。すると　足から地面が面白いほど離れていく

『うええええーッ！？』

僕は10メートル近い高さまで跳んでいた。

あり得ないほどのジャンプ力だ…自分でも驚いた…なぜあんなに速く走れたり　こんなに高く跳ぶことができるのだろうか？僕は人間じやなくなってしまったのか！？

そんなことを考えているうちに　僕は何事もなかったかのように地面に着地した。今はそんなことを考えてる場合じゃない　あの女から逃げ切ることが先決だ。

僕はすごい速さで走った　走り続けた。いつの間にか恐怖心などな

くなっていた。何も怖いものなどない。僕に追いつける奴なんていやしない。僕は風だ！！

そう頭の中で呪文のように何度も呟いた。そのおかげで自分が追われている事などほとんど忘れていた、ただひたすらに走るのみ……それだけだ

第2話 1人目の犠牲者

気が付けば後ろに女の姿はなかった。どれほどの時間走っていたんだろう?…もうかなりの距離を走った気がする。

それなのにさっきとあまり景色が変わっていない、僕はまだ道路の上にあった。ここはどこなんだろう?僕は急に不安になった…

あの女を振り切れたのはいいが、ここがどこなのか見当もつかない。ここはどこですか?と誰かに聞きたいところだが、周りに人など1人もいないし、さっきまで走っていた車さえ全くいなくなっていた。

あたりは しーんつと静まり返っている。その静けさが僕を余計に不安にさせた。

『あッ!!』と僕は声を上げた。

そうだ…これは夢なんだ。僕は思った。

夢じゃなければ あんなに速く走れる女なんているわけがないし、僕がこんな人間離れしたスピードで走ったり 跳んだりできるはずがない。

それにあんだけ長く走り続けたのに 息ひとつ上がっていないじゃないか。そう これは夢だからだ…そもそもあの女に追いかけられる前に 薄々そんなことを思っていたような気がする。

とにかくこれが夢なら もう逃げる必要はない。目を覚ませば帰れるんだ。僕はその場に座り込んで目が覚めるのを待つことにした。

なかなか目が覚めない…どうしたら僕は目を覚ますのだろうか？と
普通なら考えもしないような事を考えている。

しかし考えても答えなど出ない。今の僕にできることは やはり待
つことだけだ。そんなことを考えているうちに、遠くの方で何か白
い物体がすごいスピードでこちらに向かって近づいて来ているのに
気が付いた。

あの女だ…だがもう逃げる必要はないんだ…これは夢なんだから…
僕は立ち上がり こちらに向かって走ってくる女に指を差して 大
きな声で

『これは夢だつて分かってんだぞツ！！バーカ！！バーカ！！』

と、夢と分かりながらも 少し怖かったのか、子供みたいなお話を
言ってしまった…

しかも 声もかなり震えていた気がする…カツコつかねえ…僕は少
し後悔した。

すると 女はニタニタと笑いながら さらに僕へと近づき 僕の目
の前でピタリと止まった。

正直怖かった…心臓の鼓動が早まるのが分かった。

僕は恐る恐るその女の顔を見た。10代後半の若い女の子にも見え
るし、30過ぎのおばさんのようにも見えた…顔には大きな火傷の
ような傷がある。

その傷はまだできたばかりのようで、血が少し滲んでいた。そのせいもあり、顔を見ただけでは年齢を特定することはできなかった。

最初にこの女を見た時には こんな傷はなかったような気がするが…よく見ると 首の裾の部分も少し焼け焦げている…何かあったのだろうか？そもそも誰なんだコイツ？

…と、一瞬思ったが、これは夢なんだから どうでもいいと すぐに考えを改めた。すると 女は小さな声でボソツと呟いた。

『夢じゃないから…』

えっ！？と思った瞬間 女は僕の首に掴みかかり ぎりぎりと爪を立てて僕の首を絞めはじめた。

く…苦しい…夢のはずなのに僕は息をすることができなかった。ど…ういう事だ！？この女の言うとおり コレは夢じゃないのか！？

僕は女の腕を引き剥がそうと 手を伸ばした瞬間…女はパツと僕の首から手を離し、そのままうつ伏せの状態で地面に倒れた。

何が起こったのかよく分からなかった…だが僕はその女を見て啞然とした…

背中全体に大きな火傷の傷があった…背中部分の服と皮膚は酷く焼け焦げ 血もかなり滲み出ている、 全体的に赤黒く かなり痛々しい。それに肉が焦げているような臭いもした。

僕はしゃがみ込み 女に呼び掛けてみたが…なんの反応もない…死んでいるみたいだ…

一瞬 僕が殺したのかと不安になったが、そんなはずはない…僕はただ逃げていただけだ。死因はやはり この背中の傷だろう…

誰かにやられた…？僕の頭の中に色々な考えが浮かんだ…

たとえば 僕が追われているのを誰かが見ている、その誰かがこの女を止めようとして…結果的に殺してしまったとか…

うーん…それはないか……なら

この女は 実は誰から逃げている…自分が追いかけてらると勘違いした僕が 逃げている間に その誰かに追い付かれて 殺されかけたが なんとか逃げて来て、結局 ここで力尽きてしまったとか…

後者だとしたら この女は僕に助けを求めて 僕に近づいてきた可能性もある…いや…でもこの女は僕の首を絞めたじゃないか…ということは やはり前者なのだろうか？

でも死んだ女の背中を見た限り、人がやったものとは僕は思えなかった…背中が酷く焼け焦げている…犯人は火炎放射器でも持っているんだだろうか？

…いや普通持っていないだろ。ということとは事故か？事故っていつでもどんな事故だ！？たとえば思い浮かばない…思い付いたとして相当こじつけな考えになってしまいそうだ…

『あんた何やってんの？』

そんな事を考えていると…後ろから若い男の声が聞こえた。

振り返ってみると そこには上半身裸の いかにも怪しげな風貌の
男がこちらを見ていた。

第3話 出会うはずのない二人

何なんだこの男…何で上半身裸なんだよ!?!…今12月だぞ…寒くないのか?

『何かあったんスか?』

男が訪ねてきた。

『えっ?…えと…』

ま…まずいな…僕は今この男を怪しい奴だと思ったが、この男からしたら 死体のそばでしゃがみ込んでいる僕の方が断然怪しいかもしれない。

『その人死んでんの?』

男は率直に訪ねてくる。

うろたえるな…別に僕はやましい事など何もしていない、正直に話せばいいだけじゃないか。

『そ そうだ…死んでるんだ…』

僕は答えた。

『あんたが殺したの?』

男はストレートに訪ねてくる。

『違うッ！！僕じゃないッ！！』

僕は自分でも驚くぐらい大きな声を上げてしまった。何を必死にな
ってるんだ僕は…余計怪しいじゃないか。

『ふははッ！！必死すぎッ！！余計怪しいぜ』

男は笑った。

うう…どう説明すれば分かってもらえるだろう…僕は人に物事を説
明するのは 苦手な方だ…今までに起こった出来事を そのまま話
せば分かってもらえるだろうか…？

僕がどこから説明しようかと考えていると 男が先に口を開いた。

『別にそんな不安そうな顔しなくていいぜ。あんたが殺したんじや
ないんだろ？…俺には分かる』

『！？…信じてくれるのか？』

『ああ…てか実は遠くから見てた（笑）』

『…見てたのかよ…』

『女があんたの首を絞めたと思ったら 突然その女が倒れたみたい
だったな…』

どうやらこの男は 僕が道路に1人座り込んでから、そこに女が
やって来て…僕が首を絞められて…女が地面に倒れるまでの光景を
一通り見ていたらしい…

だがそこを見ただけで 僕が殺したんじゃないと言い切るのは詰めが甘いような気がする…この女を見る限り死因は背中への傷だ…僕が前もって女を瀕死状態までもちこみ、ここまで逃げてきただけという可能性だってある。

この男は人を疑うことを知らないのか？つか何で上半身裸なんだよ？おかしいだろ…色々疑問があったが反論はしなかった。僕が殺したんじゃないという事は 僕自身が一番分かっている。この男の言っていることは正しい。

『とりあえずアレだな……警察呼んだ方が良くね？』

男は言った。たしかにその通りだ…全く気が付かなかった。色々日常生活とは かけ離れた事が起こりすぎて、常識的なことが頭に浮かんでこなかった。

さっきまでは、ここで起こっている事は 全て夢だと思っていたが…あの女に首を絞められた時の痛みは本物だった。あまりにも非現実的な事が起こりすぎて 僕はコレが夢だと思い込み 現実から逃げていたのかもしれない。

『そうだな…とりあえず警察を呼ぼう』

僕は自分のズボンのポケットから携帯電話を取り出そうとしたが…ない…どこかに落としてしまったのだろうか？仕方なく僕は男に連絡を頼むことにした。

『悪い どこかに携帯落としたみたいだ…君の携帯で警察に連絡してくれないか？』

『えっ？マジでッ！？俺が電話すんのかよッ！？ 警察に電話なんかしたことねえし！！スゲーこえーよ！！緊張すんなッ！！』

『……なら携帯を貸してくれ、僕が電話する』

『頼むわー！！』

すると男はズボンの後ろポケットから携帯を取り出し、僕に手渡した。

僕はすぐに電話しようとして携帯をいじったが、画面は真っ暗のままだった。

『あれ？これ電源入ってないのか？』

『ん？ちよつと貸してみ』

僕は男に携帯を渡した。

『あれ？電池切れてんのかな？分からん！！』

男はなぜか偉そうだった。

『仕方ない とりあえずこの女の人を道路の脇まで運ぼう。このままじゃ車に跳ねられてしまうかもしれないし……』

『おおー 確かにそうだな』

僕ら二人は 死体を道路の脇まで運ぶことにした。そしてジャンケ

ンで 僕が死体の頭の方を持ち、あの男が死体の足の方を持つことに決まった。

僕らは うつ伏せに倒れている 女の死体の目の前まで近づいた。相変わらず 肉が焼け焦げるような嫌な臭いがしたが…まだ腐敗が進んでいないだけマシだ…と僕は自分に言い聞かせた。

あの男は目を背けて 死体をあまり見ないようにしている。やっぱり怖いのだろうか？…どことなく体も震えている気がする…いやそれは寒いからか？…上半身裸だしな…無理もない。

そういえば 僕はまだこの男に名前を聞いていない事に気が付いた。名前ぐらい聞いておこうか…

『そういえばまだ名前聞いてなかったな お互い自己紹介でもするか』

『ええッ！？ここで！？』

男はかなり引いている…

『分かった…自己紹介は死体を運び終わってからにしよう』

『うん…そうしてくれ…』

僕らは うつ伏せに倒れている死体を見た…一瞬 死体をあお向けにしようかと思っただが、僕はその女の顔を見るのが怖く うつ伏せのまま運ぶことにした。

僕と男は恐る恐る死体の体に触れた…まだ温かい…生きているみた

いだ…いや本当に生きているのか？

僕はこの女が急に動き出すんじゃないかと ヒヤヒヤした… マジで怖い… 心臓の鼓動も早まる… 怖い怖い怖い怖い… 自分で運ぼうと言っておきながら 情けない… だって怖いんだもん… 仕方がない… できることなら また走って逃げ出したい… そんな余計なことを思っていた。

だけど…やるしかない！！僕は覚悟を決めた。

『よし！！じゃあ死体を持ち上げたら はや歩きで道路の脇まで行くぞー！！』

と僕は言った。

急に僕が大きな声を出した為 男は一瞬 ビクツとしたが、

『ええッ！？わ わかった！！』

と 返事をしてくれた。

僕らは死体を持ち上げた。死体は思ったより ずっしりと重く感じた。

『よし行くぞッー！！』

『おうー！！』

僕は はや歩きで道路の脇に向かった。だがあの男は僕のスピードについてきてくれず チンタラと運んでいる。

『早くしろー！！遅いぞー！！』

『そつちが速いんだってッ!!』

仕方なく僕は男のペースに合わせて死体を運んだ…なんとか無事に運ぶことができた。僕たちは死体とは少し離れたところに座り、一息ついた。

『ふう〜…』『ふい〜』

僕と男は同時に安堵の息をもらした。

『…そうだッ!!自己紹介だ自己紹介』

僕は思い出したかのように言った。

『そついえばそんなこと言ってたな…』

男は少し疲れているようだが、名前くらいは教えてくれるだろう。相手の名前を聞く時は、まず自分から名乗るのが礼儀と聞いたことがある。僕は自分から先に名乗ることにした。

『じゃあまずは僕からだな…僕の名前は風吾』

『フーゴ?…変わった名前だな…面白い(笑)』

男は少し笑った…結構カッコいい名前だと思うんだけどな…僕はそのまま自己紹介を続けた。

『神奈川 在住の普通の大学生だ…うん後は特に言うことないな』

…』

『神奈川に住んでんの!?!』

『えっ? まあそうだけど…』

男はどうでもいいところに食い付いてきた。

『次は君の番だ』

僕は男に自己紹介をするよう促した。

『俺か?…俺の名前は…翼…かな』

『ツバサか…いい名前だな…なんかそれっぽい』

何がそれっぽいのか自分で言うておいて よく分からなかったが、ツバサはそのまま自己紹介を続けた。

『え〜と…まあ静岡に住んでる…高校生…だな』

『高校生かよ…てことは僕より年下か……んツ?てか静岡に住んでんのか?』

『ああ…うん』

『てことは ここって静岡なのか?』

『知らないよ…そういえば俺ってば気付いたらこの道路の上にはいたんだよねえ』

『僕と同じだ…僕も自分が何でここにいるのかも 分かっていない…』

そつだ…何で僕はこんなところにいるんだ？…つか ここはどこだ？

僕は神奈川に住んでいて ツバサ は静岡に住んでいると言っている…普通に生活をしていれば 出会うはずのない二人が出会っている…

一体どういう事だ？誰かがここに僕らを連れてきたのか？…だとしたらなぜ？…いやマジで分からん…どゆことッ！？

考えても答えたなど全く出る気がしなかった。もう考えても仕方ない 行動あるのみだ…

『あっ！…！』

と僕は言った。ツバサ はなんだコイツという顔で僕を見た。僕は1つツバサ に聞きたいことがあるのを思い出した。

『ツバサ ちょっといいか？』

僕は言った。

『なんだよ…』

ツバサ はちよつとイライラしているようだったが…僕は構わずツバサ に質問した。

『お前なんで上半身裸なんだ？』

どうしても良さげな質問にツバサ 少し呆気にとられていた。

『ああ…なるほど…これか…』

ツバサ は少しの間 黙っていたが、いを決したように立ち上がった…

『その理由はコレだ…』

というと ツバサ はこちらに背を向けた…その背中を見た瞬間
僕はゾツとした!!

ツバサ の背中には肉なのか内臓なのか よく分らない奇妙な物体
がへばりついていた…しかもかなり大きい…

僕はあの女の死体を思い出した…あの死体には 背中に大きな火傷
のような傷があった…おそらくあの女はそれが原因で死んだ…

その傷と何か関係があるんじゃないかと…僕は不安になった。

第4話 人質

『お前大丈夫かよ…』

僕は心配になった。このままでは ツバサ もあの女と同じように死んでしまうんじゃないかと思ったからだ。

『まあ大丈夫…別に痛くないし…』

ツバサ は言った。

『大丈夫って言っても…全然大丈夫そうに見えないぞ…病院行った方が良くねーか？』

僕はツバサ に病院に行くよう言った。

『うん…そつだな…』

ツバサは さつきより元気がないように見えた。

『…でも病院ってどこにあんの？』

ツバサが僕に聞いた。僕はツバサに病院に行くよう言ったが、ここがどこなのかも分からないのだから 病院に行こうにも行けるはずがない。

『う〜ん…困ったな…』

こういう時は もういつそのこと救急車を呼びたいところだが、携

帯は使い物にならなかつたし 周りに公衆電話もなければ ひとつこ1人いない。

『とりあえず そうだな…人を探そう。誰かしら人を見つければその人に救急車を呼んでもらえばいいし、ここがどこなのかも分かるだろ』

とにかく人を見つければ 警察も救急車も呼ぶことができる。今のこの奇妙な状況を打破するには それしかないと思つた。

『その前にツバサ…お前寒くないのか？そんな格好で長いこといたら凍え死ぬぞ…』

『ん？俺は平気…この背中についてるヤツ、結構熱を持ってて熱いんだ…そのおかげで裸でも寒くないよ』

『なんだよそれ…暖房効果もあるのか…便利だな』

と 僕は冗談で返したが、心の中では心配で仕方がなかつた…あの女は背中に火傷のような傷があつて死んでいた。ツバサの背中についているヤツは熱を持っていて熱いらしい…

熱〓火傷。僕にはあの女の背中との傷と、ツバサの背中のヤツが、何か関係があるような気がしてならなかつた。

『人を探すと言っても、まずどこに向かつて探しに行くかな』

ツバサは言つた。

『僕は向こうの方から道路沿いに走つてここまで来たんだけど…こ

ここに来る途中 数台走ってる車を見かけただけで…あの女以外 人の姿は見かけなかったな。それにここに来る途中 建物なども特になかった…道路の両側には大量の木がしげっているだけだ』

ちよつとセリフ長いな と思いつつも僕はツバサに説明した。

『ふん なるほど…まああんたが来た道を戻ってもしようがねえし、このまま先に進もうぜ』

まあツバサの言う通りだ。僕も今来た道を戻る気はしないし、このまま道路沿いに進んで行けば やがてどこか人のいる場所にたどり着けるはずだ。

とにかく後戻りするより 先に進みたいという気持ちの方が強かった。それが正直な意見だ。

僕らは歩いて先に進むことにした。

またすごいスピードで道路を走つてやろうとも思ったが、ツバサの背中のヤツがなんなのか分からないし とにかくあまり刺激になるような行動はとらない方がいいだろうと僕は思った。

それにツバサが僕みたいに人間離れたスピードで走ったり 跳んだりできるのかどうか分からない。

もしできなかったとしたら ツバサは僕を見てどう思うだろう？…やっぱり怖いと思うだろ…僕があの子をはじめて見た時と同じように…

今は普通の人間のふりをしておこう…いや…僕は今でも自分を普通

の人間だと思っっている。

あれはもしかしたら奇跡が起きただけかもしれないし…

人間 極限状態に追い詰められた時、信じられない力を発揮するっていうしな…そうだ…そういうことにしておこう…今走ったら 普通の速度で走れるだろう…きっとそうだ

…。

てか なんで僕はこんなにも普通の人間でありたいと必死なんだ…まるで妖怪にでもなったみたいだな…そんなに深刻に考える必要はないんだ…僕は自分に言い聞かせた。

『おい あんた顔色が悪いぞマジで…大丈夫か？…つかスゲー真顔すぎ…なんか怖いって（笑）』

ツバサが僕を見て笑った。

この男は相変わらず率直だ…まあ素直なだけなのかもしれない…悪い奴じゃないということは分かる…もしかしたら この場を なごませようと言ってくれただけなのかもしれない。

今思うと 僕が考え事をしていたせいで、長い間 沈黙が続いていた…そのせいで ツバサに気を使わせてしまったようだ。

なんだか申し訳ない気持ちになった…

僕は歩きながら ツバサに質問をすることにした。ツバサには色々聞きたいこともあるしな。

『てかツバサ…その背中のヤツはいつからあるんだ?』

『え?コレ?...いつからだろう?...多分この道路の上にはいた時からすでにあったんだと思う...』

『その背中のヤツができた原因は分かるか?』

『いや分かんねえよ...分かっていたら あんたに話してっから!』

『まあ...そうだな...』

『てかさあ...もういつその事この背中のヤツ剥がしてくんねえ?』

『...いや無理だろ!?それ無理やり剥がしたらお前死ぬんじゃないのか!?』

『きつと大丈夫...今なら大丈夫な気がする!!』

ツバサは自信満々に答える。

いや馬鹿だ...絶対馬鹿だ...それに今なら大丈夫な気がするってどう
いう事だよ...大丈夫な時と大丈夫じゃない時の差はなんなんだ?気
持ちの問題か?

僕はツバサの背中のヤツをまじまじと見た。それはどう見ても ツ
バサの背中にガツチリとくっついている...というより背中の皮膚か
ら直接生えているように見えた。

こんなもん剥がしたら出血多量で死ぬだろ...

『ん？』

僕は気が付いた。

ツバサの背中の中のヤツは、カドが少し角張っていた。それは骨のように見える。中に骨が通っているようだが、まさか肋骨が直接背中に突き出てしまっているのではないだろうか？僕は怖くなった。

…これはツバサには黙っておこう。言ったところで、ツバサを余計不安にさせてしまうだけだ。

『ん？って何だよ！？なんかあんのかよッ！？』

ツバサは不安そうな顔で僕を見た。

『いや…まあやっぱり引き剥がすのはやめた方がいいだろ…病院でちゃんと見てもらった方がいい』

『分かってるって、冗談で言ってみただけだ』

この状況でそんな冗談を言われても正直、笑えない。…つか冗談で言ってるのか、本気で言ってるのかさえ、僕にはよく分からなかった。

そんな、なんの進展もなさげな会話を繰り返しながら、僕らは道路の上をひたすら歩いて行った。

しばらくすると、道路の先にトンネルが見えた。

トンネルを見ると、中は真っ暗だったが、入り口付近に一瞬、女の

人のような影がチラッと見えた。

『お！誰がいる！？』

ツバサはトンネルに向かって駆け出した。走っているツバサを見る限り、やはり僕みたいにとてつもないスピードで走ることはできないようだ。

僕はツバサの後を追おうと 走ろうとしたが、ここですごいスピードで走ってしまったのは ツバサが驚くだろうと思い…歩いてトンネルへと向かった。

ツバサは そのままトンネルの中に入って行った。すぐにツバサとその女の話し声が こっちに聞こえてくるんじゃないかと期待したが…妙に静かだ…

おかしいなと思いつつも…僕はトンネルの目の前までたどり着いた。中は異様なほど真っ暗だ…それに静かすぎる…ツバサはどうしたんだ？…

『ツバサ？』

僕はトンネルの中へ呼びかけてみたが…反応はない。まさか…何かあったのか…

不安と恐怖が僕の中に込み上げてきたが…僕は恐る恐るトンネルの中に足を踏み入れた。

中は真っ暗で何も見えない…

『動かないで…』

女の人の声が聞こえた。

僕は声が聞こえたを方を見た…だが真っ暗で何も見えない。

『あんた誰だ？』

僕は女に尋ねた。

『あなたこの状況が分からないのッ！？』

女は少し声を荒げた。

この状況と言われても、真っ暗で何も見えない…

だが だんだんと目が慣れてきて、僕は今の状況を理解することができた。

僕の目の前にはツバサがいる、その後ろには ツバサの後頭部に銃を突き付けた女が立っていた…

『沙織さん…これからどうするの？』

そのさらに後ろから 女の子の震えた声が聞こえた。もう一人いるのか…この人達の目的は何なんだ？…考えても僕には分かりそうにない。分かったのは この銃を持った女は サオリという名前だということだけだ。

『とりあえず雅也さんが来るのを待つわ…それからどうするか考え

ましよう』

と サオリは言った。マサヤさん?…もう一人仲間がいるのか…
僕達はこれから何をされるのだろうか?…

もしかしたら殺されるかもしれない…いや殺すんだつたらもうすでに殺されているか…とにかくただではすまない気がする…このままじゃヤバいな…

どうにかして あのサオリという女から銃を奪うことはできないだろうか?…

僕は考えた。

僕の足の速さなら…もしかしたら なんとか銃を奪うことができるかもしれないな

書いてる途中

サオリから銃を奪うには やはり一瞬の隙を付くしかないだろう…

隙を付くと言っても 銃はツバサの後頭部にずっと押し付けられている。

ツバサの後頭部から銃を離れた時がチャンスなのだが…その時は訪れるだろうか…？

トンネルは真つ暗なので、サオリの顔は全く見えぬ シルエットだけが見えている感じなのだが…かなりを僕を警戒しているのが分かる。

サオリはピクリとも動かず、ただ僕の方をじーっと見ている…多分気持ちの面で余裕がないのだろ…警戒している人間に隙など生まれるのか？…僕はどんどん不安になってきた。

相手の顔が見えれば、多少その人の心理も読み取れるのだが…

それにしても ツバサが妙に大人しい…アイツならこんな状況の中でもギヤーギヤー騒ぎそうな気もするが…かなりビビっているのか…？…

それとも 今僕の目の前にいるのは実はツバサではないんじゃないだろうか？…サオリ同様 ツバサの顔も暗くて見えていない…

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9099z/>

潜在能力（仮）

2012年1月3日05時46分発行